



題字は川又正筆
 茨城国語教育学会
 会報さらしみ
 第三十五号
 発行所
 〒310-0056
 水戸市文京2-1-1
 茨城大学教育学部
 国語教育教室
 茨城国語教育学会
 電話 029-228-8111(代)
 228-8214(直)
 印刷所
 〒310-0043
 水戸市松が丘2-3-23
 佐藤印刷株式会社

「ノートを取る力」を向上させよう

茨城国語教育学会会長

齋木久美

今年度より、本学会会長に就任しました。

よろしくお願いたします。

本学着任当時、私は情報文化課程に所属していましたが、二〇二〇年度から国語教育教室の所属になりました。担当授業に変わりはありませんでした。担当授業に変わりはありませんが、コロナ禍で、学生のいないキャンパスに時折出向くだけでした。

とはいえコロナ禍でも、遠隔授業が実施できました。パソコン等の情報端末利用で多様な資料が提示できるように became だけでなく、振り返りや課題確認も簡便になりました。その一方で、対面で行うことで得られるよさも実感させられました。

この年の三年生数名に遠隔授業の感想を聞いてみたところ、「資料が

るわけではありませんので、小学校低学年では板書を写すことから始めます。指導者の板書は、学習内容を分かりやすく示したものですから、板書を写すことで再構成する方法を、学んでいることになります。

膨大、読んでいる最中に説明が始まってしまふ」、「ノートを取るうと思っても、スライド資料の展開が早くて書きとれず、やる気をなくす」といった声が上がりました。これについては、いざれ検討したいですが、内容理解のためには、ノートを取ったほうが頭に入るといった学生が数名いました。ノートを取る習慣がないと答えた学生もいましたが、ノートを取る習慣がある学生は、遠隔授業でもノートを取ることで内容理解に役立てていることがわかりました。

「ノートを取る力」を板書を写すことと同義にとらえられることがありますが、そうではありません。与えられた情報を自ら再構成することこそがノートを取るのだと私は考えています。

膨大、読んでいる最中に説明が始まってしまふ」、「ノートを取るうと思っても、スライド資料の展開が早くて書きとれず、やる気をなくす」といった声が上がりました。これについては、いざれ検討したいですが、内容理解のためには、ノートを取ったほうが頭に入るといった学生が数名いました。ノートを取る習慣がないと答えた学生もいましたが、ノートを取る習慣がある学生は、遠隔授業でもノートを取ることで内容理解に役立てていることがわかりました。

「ノートを取る力」を板書を写すことと同義にとらえられることがありますが、そうではありません。与えられた情報を自ら再構成することこそがノートを取るのだと私は考えています。

とは言っても最初から再構成でき

自分でノートを取ることは、よく学ぶことにつながっているはずですよ。

コロナ禍以前に、教育学部生を対象として、授業でノートを取るかどうかについて調査したことがありますが、ノートを取らないと回答した学生の理由として、その習慣がないだけでなく、「自分でまとめたノートより、よくまとめられた友達のノートの方が、テスト対策になるから」というものがありました。

内容が整理された記録が入手できるのであれば、自分でノートを取る必要はありません。でも、人が整理してくれたノートが常に手に入るとは限りません。だからこそ、自分でノートを取る練習をしておくことが大事なのではないでしょうか。

(茨城大学)



第四十二回茨城国語教育学会研究発表会報告 (令和五年二月二十三日)

文責・事務局 鈴木 一史

令和四年度の研究発表会は、令和五年二月二十三日に開催されました。開催方法は、基本はオンラインで実施し、本部を大学内に設けてそこから発信するハイブリッド方式を取りました。在学生を含め百名以上の参加者とともに、配信場所での議論だけでなく、宮崎尚子先生の司会で写真のようなネットを介した発表と質疑応答も行われました。



以下、概要について報告致します。開会行事では本年度で会長を辞する川嶋秀之名誉教授が、就任時の思いを振り返り、学会誌の毎年刊行と会員相互の親睦の深まりという二つの願いについて、お話をされました。



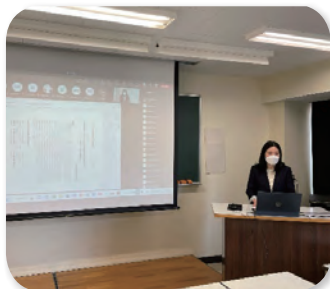
総会では、事務局から昌子佳広先生が会則改正について提案をされ、承認されました。これにより本学会報「さらしめ」と学会誌『茨城の国語教育』は紙媒体を廃止し、論考や会報内容は国語教室のウェブページ (<http://kokugo.eduhibaraki.ac.jp/>) に掲載いたします。このことにより、学会誌も毎年発行となります。会費等の改正もありますので、ウェブページをご確認ください。

続いて、本年度内地留学をされたお二人の先生の実践研究発表がありました。藤田沙織先生(常陸太田市立世矢小学校)のご発表は、「児童一人一人が主体的に表現しようとする国語

科学習指導の在り方―「書くこと」における授業のユニバーサルデザイン化を通して―と題して、カリキュラムマネジメントの視点を取り入れた、国語科と図工の融合的な学習活動を実施されたご発表でした。

古家野理恵先生(常総市立石下西中学校)のご発表は、「古典に親しむ授業づくり―中学校第三学年「君待つとー万葉・古今・新古今」「夏草―「おくのほそ道」から―」と題して、古典教育の今日的課題を複合的な教材を用いて解決した実践であり、学習者の主体性を引き出した取り組みのご発表でした。

続いて、令和三年度から本学に就任された李満紅(リ・まんほん)先生のご講話がありました。



李先生は「奈良時代前期の日本文学における漢籍受容及び和歌の創造―大伴旅人の「型」の意識を中心に―」と題して講演をされました。先生の専門領域は漢文学ですが、日本の古典籍にも造詣が深く、本講演は漢籍と日本の古典を結びつける内容であり、万葉人である旅人が「短歌」「長歌」「漢詩」「漢文」という「型」に込めた思いを明らかにし、文学史研究の起点を示してくださいました。なお、詳細は令和四年度発行の『茨城の国語教育』に掲載されます。

最後に令和五年度から会長に就任される齋木久美先生から、今後の本学会への思いについてお話があり、本学会そしてこの研究会が同窓的役割を担い、在学生のみならず卒業生など会員相互の繋がりを密にしていきたいと語られました。



(茨城大学)

茨城国語教育学会活動記録

「茨城大学・附属中・小の懇話会」

比 佐 中

本会は年に二回(夏・冬)、茨城大学・附属中・附属小の国語教員が国語教育について語り合う会である。

◎令和四年度 第一回

令和四年七月二十七日

茨城大学教育学部図書館於

第一回は「古典の学習を小・中学校でどのようにつないでいくか」をテーマに、それぞれの考えを伝えあった。大学からは川嶋・昌子・齊木・宮崎・李が、附属中からは安が、附属小からは比佐・菅原・宮内(敬称略)が参加した。以下は、その一部である

・古典の学習について、教育実習生と話をすると、

「内容は、ほとんど覚えていない」

「暗唱は、やった気がする」

「中学校で古典の時間は苦痛だった」

という声を聞く。古典の学習を、小学校と中学校では、どのように行っていくのか話し合いたい。

○暗唱について

・中学生は、小学校の時に「暗唱をさせられた」とよく口にする。この「させられた」という意識を変えていきたいと考えている。そのためには、生徒が地域でよく目になっているような碑文や、共感を覚えるようなものに触れさせていきたい。

・暗唱に、どのような価値があるのか。幼少期には、覚えることが嬉しくて、暗唱をする子どもは多い。しかし、高学年や中学生となったときには、覚えるだけというのは単に言葉のパターンを記憶するだけで、古典の学習とはなっていない。その一方で、暗唱をテストにしている指導も見かけることが多い。

○古典学習について

・もしかししたら、教師の側にも古典に対する苦手意識があるのかもしれない。文法は一つの学習ではあるが、古典文法のみを扱うのではなく、小・中学校関係なく、「ものの見方・感じ方」を学ばせたい。現代に生きる我々と、古典の世界では、どんな共通点があつて、どんな違いがあるのか、読んでそれぞれに考えてほしい。そうした読みが、古典の世界に入る扉を見つけたら、開いたりしていくことになる。中学校では、生徒が小学校でどのような古典の学習を行ってきたのか把握するべきである。

◎令和四年度 第二回

令和五年二月十一日

茨城大学教育学部A棟二二四号室於

第二回は「故郷」をテーマに、それぞれの考えを伝えあった。大学からは川嶋・昌子・齊木・鈴木・宮崎・李が、附属中からは安・中村・小林が、附属小からは比佐・菅原・宮内(敬称略)が参加した。以下は、その一部である

・「故郷」は、日本のみならず中国でも定番の教材で、誰もが読んでいれる。しかし、日本と違うところは、小学校の段階で登場人物の「レントウ」を主人公にした絵本に触れさせ、レントウへの憧れをもたせてから中学校で読ませているところである。生徒は、事前にレントウを知った上で『故郷』を読むため、自然と主人公とレントウを対比させながら読むことができていく。

日本でも、そうした学習は可能なのか、検討を試みた。宮崎と李で、中国で読まれている絵本を『英雄ル

ントウ』という名で、日本人向けに作り直し、中村によって附属中学校で授業を行った。

○授業を行つての実感

・第三学年四クラスで実施。二クラスは先に『故郷』を学習し、最終時に『英雄レントウ』を読む。別の二クラスは中国同様、先に『英雄レントウ』を読んでから学習する。それぞれのクラスでの、単元の導入時と終末での記述を比較した。

従来の方法で授業を行つても、登場人物の思いに触れることはできていたが、先に『英雄レントウ』を読ませたクラスの方が、登場人物に寄り添って読む姿が見られた。さらに、当時の社会情勢が登場人物に与えた影響などについても考える姿が見られた。

○教材化について

・今回作成した『英雄レントウ』が効果的であることは分かるが、中国のように小学校で扱うとなると、「なぜ故郷だけ」という疑問が出る。「中学校で学習するから、小学校でも」ということでは弱い。

・『英雄レントウ』によって、生徒の読みについて道筋を作ってしまう可能性もあるため、今後、より研究を深めて欲しい。

(附属小学校)

教師の資質―人と関わる

飯 島 萌

私の大学生活は、入学式もないまま自宅のパソコンの前で始まった。同級生たちと初めて直接顔を合わせたのは、入学から約五か月後だった。オンラインでのグループワークや懇親会などが何度か行われていたため、名前と声は知っているが、表情や背丈、髪色など、初めて得る情報が多く、自分が勝手なイメージを持っていることを自覚したり、何度か話したことがある相手なのに、初対面のようにぎこちなさがあったりした。その後もなかなか打ち解けられないまま、距離が縮まらないように感じられる部分が生じはあった。同年はもちろん、先輩・後輩の皆さんともほとんど交流がない。対面での活動ができないことにより、この国語選修として続いてきた行事などもほぼ開催されないまま三年間が経過してしまい、様々なつながりが薄れてしまっていることは実感している。大学生活ならではの人やもの、考え方の新しい出会いがどれほど失われていたかと考えると、多少なりとも悲しいと感じる部分はある。

このような生活で、他者との交流がぐんと減り、関わり方に不安を抱いてしまうこともあった。一方では、文章についても会話においても、伝え方についてよく考えるようになってきた。文字上のコミュニケーションでは、感情を乗せられない分、不快感を与えないよう、また情報に誤解がないようにと、より一層注意を払うようになった。オンラインでは、大人数を相手にして自分から話し出すことが怖く感じたり、反応を気にしてしまったりすることが増えた。話の切り出し方や、表情の見せ方で自分の意図しない印象が伝わってしまうことが怖くなったのだ。画面とはかり向き合い、顔が見えず、対面のコミュニケーションの勘が鈍ったからだろうか。段々とリアクションボタンなどが活用されるようになり、聞き手の様子が少しわかるようになっていったが、それでもなお、場に一緒にいるときの空気感は再現できない。顔を合わせて話しているときには、表情や間合いに助けられていることを強く感じた。

この三年間は期待した大学生活とは違っていたが、この学年でしかわからない反省や気づきがあるだろう。コロナ禍を言い訳にせず、残りの一年間は大学でしか学べないこと、感じられないこと、できないことにどんどん挑戦したい。経験値を増やし、新たな価値観を獲得し、教師になるための資質を養っていききたい。

(国語選修四年次)

「何か」を追い求めること

大塚 裕 顕

皆さんは今どのように過ごしているでしょうか。教育について勉強している人、学業に精進している人、自分の趣味に没頭している人、様々なと思います。自分自身の「やりたいこと」つまり、「理想」を追い求めている生活や自身の人生を過ごしているのではないのでしょうか。私は違います。私の大学生活は私にとっての「何か」を追い求めるものです。

私は小さいころからずっと「なんでもできるね」「すごいね」「真面目だね」と言われ続けてきました。私はその言葉を信じ、「認めてくれる周りの人のために」という意識で、これまでの人生を過ごしてきました。その結果ある程度「優秀」にはなれたのでしよう。しかし、周りを優先するあまり、私には「やりたいこと」が何もありませんでした。

親元を離れ自由となった大学生活では、自分にとっての「何か」を見つけられることができる、そのように思っていました。しかし、コロナウィルスの蔓延、対面での活動の禁止などの様々なことが障害となっており、私の「何か」を見つけさせてくれませんでした。その中で私は「自分にできることは何か」といったこ

とを考え、行動を続けました。サークル長として活動を行うこと、責任をもつて様々な活動でリーダーシップをとること、ボランティア活動への参加、教育実習の代表挨拶、様々なことを「やってみよう」といった気持ちで臨みました。そして私は「教師になること」という夢を確立することができました。

私と同じように、「やりたいこと」が見つからない人も多くいると思います。周りから期待され続けて、自分自身のやりたいことを見失ってしまっている人もいることでしょう。積み重ねを崩すこと、挑戦することはとても勇気のいることです。しかし、今生きている人生は自分だけの「物語」です。その「物語」から自分の気持ちを読み取ることができると、「何か」を見つけることができます。私は信じています。

こうして私は自分の人生を豊かにする様々なことを学びつつあります。それはこれから出逢っていく子どもたちに対しても学びへとつなげることでできる肥料のようなものであると思います。そして私にとってはかけがえのない「宝物」でもあります。私はこれを教師として、子どもたちの実りのために伝えていきたいと、四年次になる今、思いを新たにしています。

(国語選修四年次)